

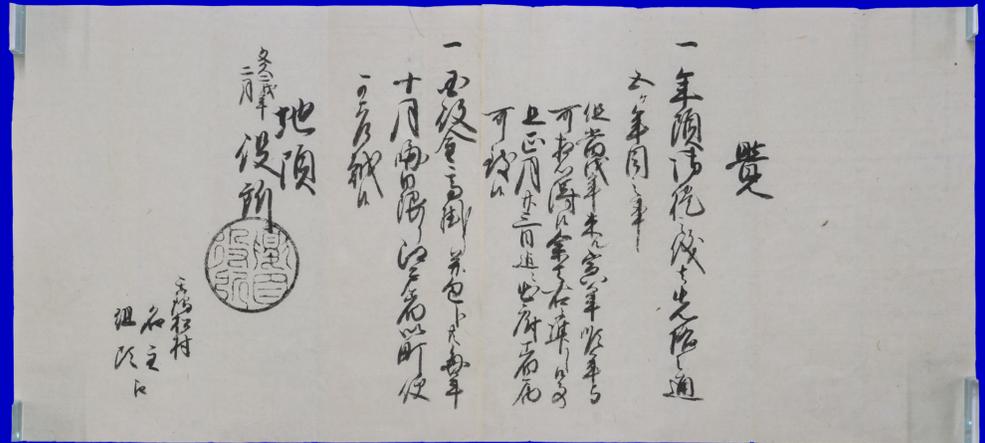
# 江戸時代の年始の行事＝直接挨拶に行く

江戸時代以前には、年始の行事は、直接訪問して新年の祝意を伝える、年始廻りをするのが主流でした。江戸時代にも、年始に当たって祝意を伝え、一層の交誼を願う書状を送る習慣がありましたが、それも、書状を使者が持参し、主人がその使者にもそれなりの応接をする、というものでした。

江戸時代には、年始に訪れるのは下の者であって、上の者は家にあって迎えるという理解が一般にありました。年始の客の訪問は、上下関係や身分制社会と不可分に結びついていました。

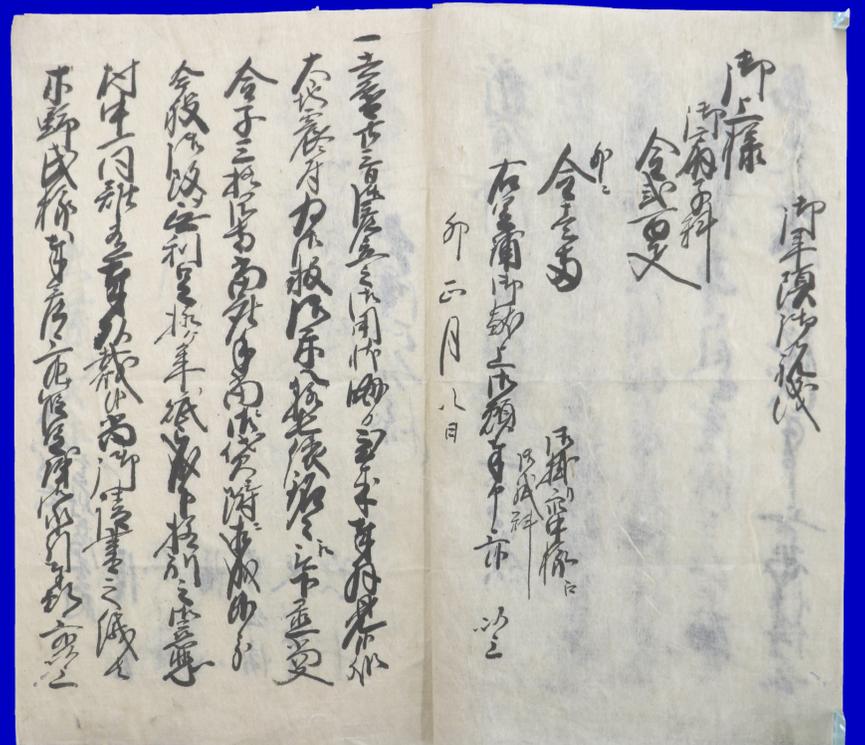
鶴松村の文久2年(1862)2月付け「覚」によると、5年に一度、名主・組頭といった村役人が地頭(近世語では「領主」といった意味)の役所に年始の挨拶(「年頭御礼」)に行くことが定められていたことが分かります。

江戸時代には、ゼロがない「数え」の数え方をしていたから、「満」の数え方だと年頭御礼は4年ごととなるようです。



文久2年(1862)2月付け「覚」

内容を検討すると、1855年の正月、1859年の正月、1863年の正月、1867年の正月に年頭御礼を行ったらしい。



卯年(安政2年/1855)正月8日付け  
[新年挨拶并大地震御救御米・金子礼状]

一 去暮廿三日御差立之御用状晦日到来、奉<sub>ニ</sub>拝見一候処、大地震<sub>ニ</sub>付為<sub>ニ</sub>御救御米一八拾七俵銘と<sub>江</sub>被<sub>ニ</sub>下置一、尚又金子三拾四両当座手当<sub>ニ</sub>御貸<sub>シ</sub>附<sub>ニ</sub>相成候分今般御改<sub>メ</sub>、無利足拾ヶ年ノ賦被<sub>ニ</sub>成下<sub>一</sub>、格別之御慈悲村中一同難<sub>レ</sub>有奉<sub>ニ</sub>頂戴<sub>一</sub>候。当御請書之儀者木野氏様へ奉<sub>ニ</sub>差上<sub>一</sub>候。此段足銭御承引奉<sub>ニ</sub>願上<sub>一</sub>候。以上。

〔現代語訳〕  
一、去年の暮れ二十三日に出してくださいだった御用状は、晦日に到来しました。拝見しましたところ、大地震につき、御救御米として八十七俵をそれぞれにください、なおまた金子三十四両を当座の手当としてお貸し付けくださいました分を、そこで改められ、無利足で十ヶ年での返済としてください、格別の御慈悲と、村中一同ありがたく頂戴いたしました。この御請書につきましては、木野氏様へ差し上げました。このことについて、足銭(宿から旅籠への補助金)も承諾くださるようお願い申し上げます。以上。

安政2年(1855)に鶴松村の人々が地頭所に挨拶に行った際の史料が残っています。それが卯年(安政2年/1855)正月8日付け[新年挨拶并大地震御救御米・金子礼状]で、安政東海地震の翌年の、地頭(領主)への新年の挨拶で、安政東海地震後の御救米と拝借金について御礼を述べています。

年月日は卯年の正月8日としか分かりませんが、寅年に起きた大地震の翌年であることから、この大地震とは安政東海地震のことで、この史料は安政2年(1855)のものだと推定できます。

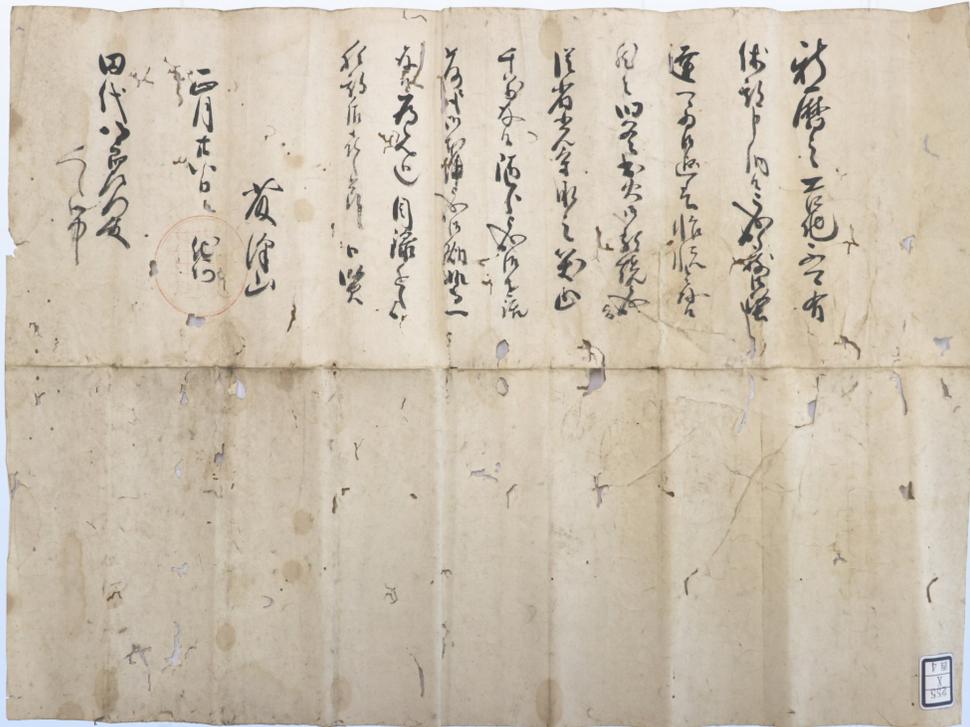
この史料によると、暮れの12月晦日に領主(このころは夏目氏知)家中の矢澤正介から書状が届き、読んでみたところ、大地震のため、御救米をそれぞれに出した、また、以前貸した拝借金を、無利足十ヶ年払いとした、との内容だったそうです。この史料は、そのことに対する礼状です。

末尾で足銭=宿から旅籠への補助金についてもお願いしていますが、その詳細については、関連史料が見つかっていないのでよく分かりません。

新年の挨拶や珍しい海苔の話に挟まれて、御救米、拝借金の御礼が書かれています。

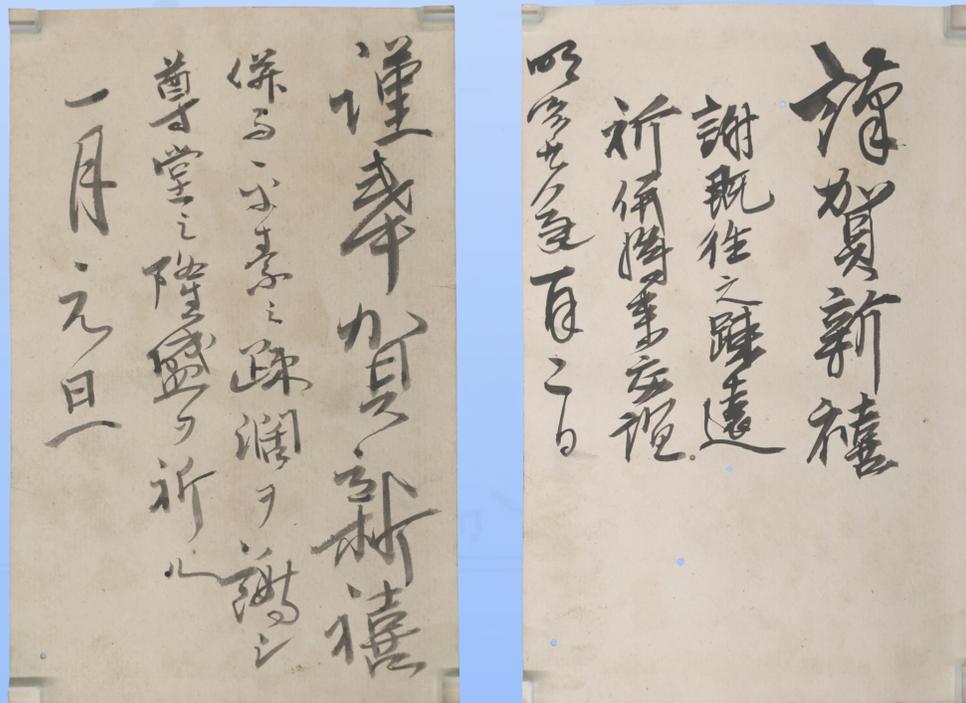
調べてみると、甲州でも、天保の飢饉の時には、新年の挨拶のときに領主と村役人が予想される凶作について話し合っているようです。新年の挨拶は、村役人と領主側が対面してやりとりをする場でもありましたから、そうした災害対策の話し合いの場でもあったのかもしれない。

# 年賀状 異様な文書様式



年不明正月28日付け〔田代八郎左衛門宛藤沢山他阿書状〕

紙を横長に折って記した、折紙という様式の文書です。最も格式高い文書（縦紙）と比べれば略式ではあるものの、きちんとした格式の書状です。年賀の挨拶が冒頭に書かれています。「然者」以降に本文が書かれています。そこには「然者旧冬出火御類焼被し成旨従省光寺承之、笑止千万存候」云々とあり、火事の見舞が本題で、その書状が正月28日に出されて、おそらくはその年初めの書状であったために、時候の挨拶として、新年の挨拶が採用されたのでしょう。



「典型的な年賀状」

年賀状とは、新年を祝い、一層の交誼を願う書状です。年賀状の風習については、小松茂美氏が、11世紀に成立した、藤原明衡の『雲州消息』に収録された正月1日付けの文書文例が最も古い例だとしています。しかし、高崎みどり氏は、典型的な年賀状の条件として、「はがきに記し、正月になる前に予め出しておくもの、そして記す文言は、「謹賀新年」「あけましておめでとうございます」など、一般の手紙文とは異なる形式で、ほぼ決まった範囲の中から選択された用語を使用ものであること」という定義を行い、年賀状という文書様式を整理し直しました。

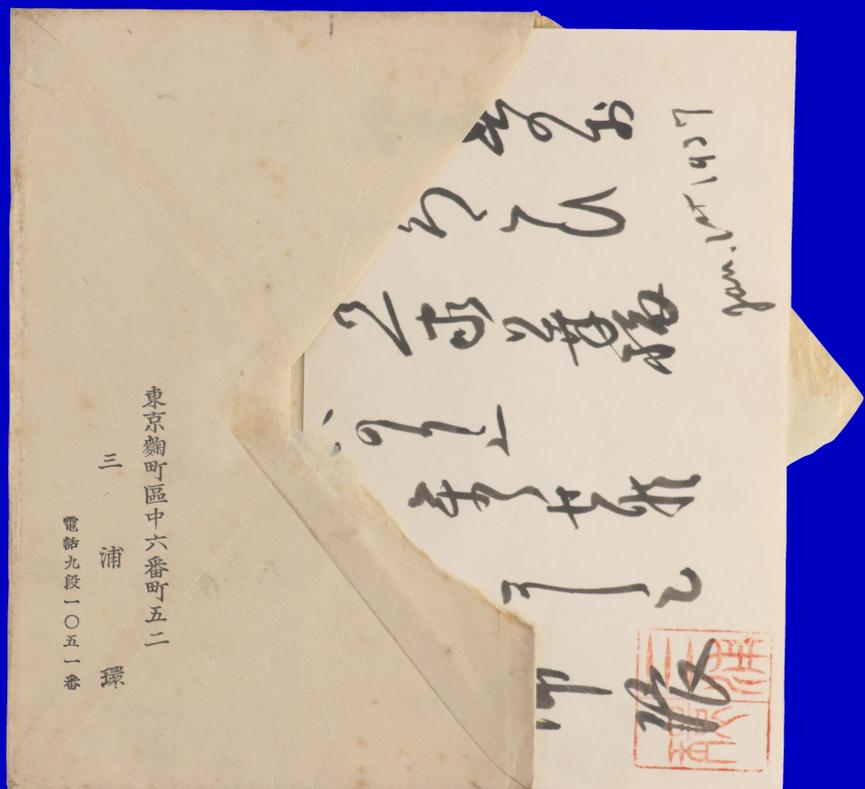
基本的に、日本の書状(私信)は、時候の挨拶などがあって、その後本文が来て、最後に結びの言葉が来ます。高崎氏が定義した「典型的な年賀状」は、前書きの挨拶と日付だけの、日本の古文書学的には、かなり異質な文書様式です。

その再整理によれば、『雲州消息』収録文例以降、およそ江戸時代までの、それまで年賀状とされてきた書状の類の大半は、たまたま正月に出されたため、時候の挨拶が新年用になっただけで、新年の挨拶は本題ではなかった＝年賀のための書状ではなかった、ということになります。

江戸時代の町家の年礼は、紋付小袖で供を連れ、年玉の品物を持って、2日から年礼廻りをする習慣で、新年慶賀の使者を待ち受ける側は、使者を丁重にもてなし、受け取った年玉を盛るものだったと言います。その風習が簡略化されると、玄関に年始帳を置いて済ます、というものになり、年始廻りに来た使者は、年始帳に署名するだけ、というものになりました。これが、江戸から明治に移ると、名刺受けと名刺に、更に簡略化されました。

この簡略化された年始の挨拶が、近代郵便制度の発足を背景に、葉書のやりとりだけに更に簡略化したものが年賀状です。その葉書も次第に簡略なものになり、葉書に賀詞(のみ)を記して送ること＝「典型的な年賀状」が始まりました。

## 三浦環の年賀状と封筒



購入史料ですが、巴里会の武藤叟に宛てた三浦環の年賀状は封筒に入っていました(左に写真)。

こうした年賀状の例はいくらか知られています。年賀はがきを封筒に入れて送るのは、年始廻りが変化していた時期に、名刺のやりとりによる廻礼を行っていたことの名残です。

封筒に名刺とともに年賀状を入れて送る、という習慣が、初期の年賀状にはありました。これが、右の三浦環年賀状が封筒に入っていることの由来のようです。

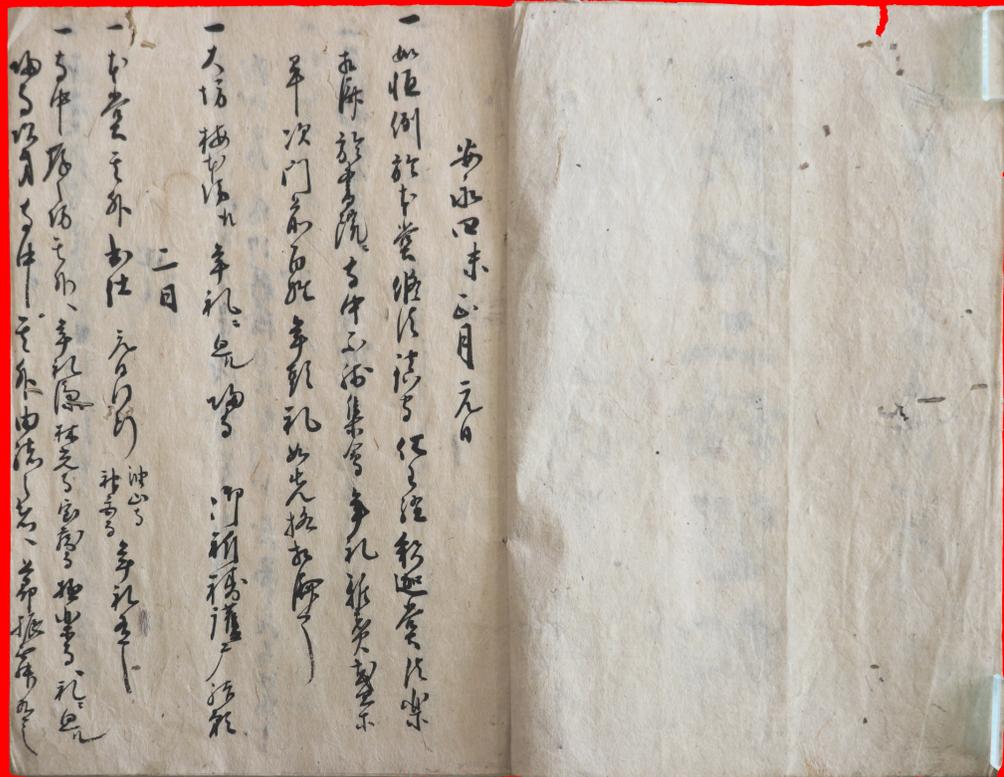
【参考文献】  
①小松茂美『手紙の歴史』(岩波新書、1976年)。  
②高崎みどり『年賀状の成立に関する研究』(『文学部紀要』1、文教大学、1987年)。  
③『特集2 年賀郵便の歴史——日本の年始に欠かせない年賀状 その変遷をたどって』(『総務省』12、2001年)。

# 西楽寺の年始の挨拶

『真俗二諦留記』正月元日〜五日条

安永四未 正月元日

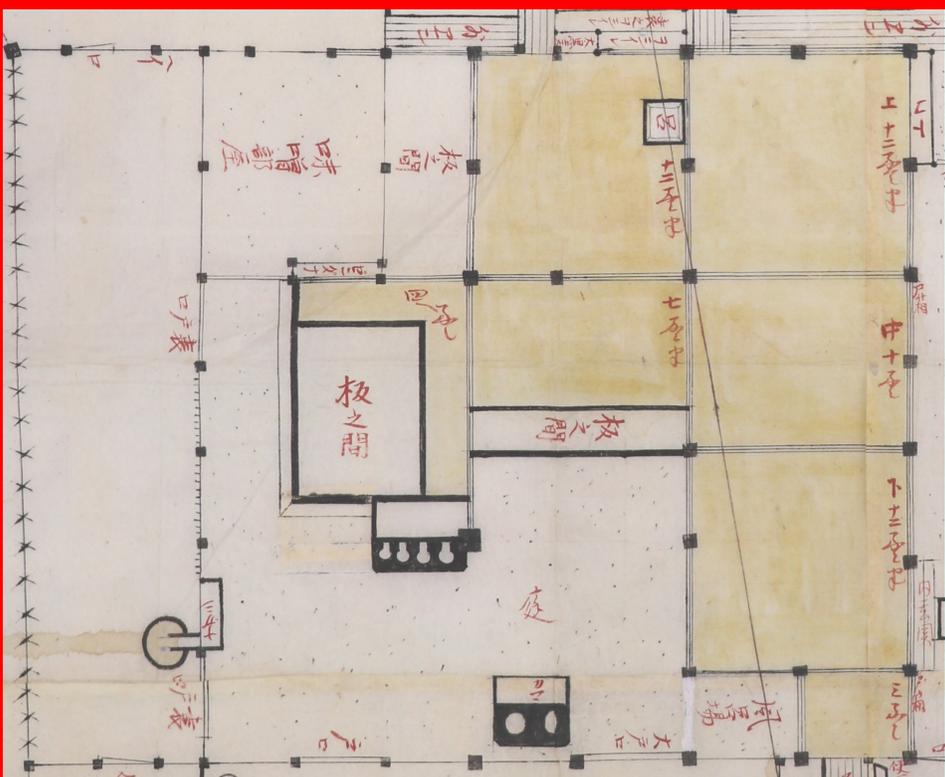
- 一、如二恒例一於二本堂一修法。鎮守仁王經、釈迦堂法樂相濟。於二書院一寺中不レ殘集會、年礼、雜煮、盞等畢、次門前百姓年頭礼如二先格一相濟了。
  - 一、大坊・梅本坊<sup>江</sup>年礼<sup>二廻ル</sup>。歸寺。御祈禱護摩結願。
  - 二日
  - 一、本堂其外出仕。元日同断。油山寺・神宮寺年礼有レ之。
  - 一、寺中岸之坊其外年礼済。林光寺、宝蔵寺、極楽寺<sup>二礼二廻ル</sup>。
  - 歸寺次第寺中其外由緒之者節振舞有レ之。
  - 三日
  - 一、本堂鎮守其外出仕同断。
  - 四日
  - 一、江戸御礼番<sup>二付参府</sup>。発足。未明。院代岸之坊、御祈禱修行智門へ申渡。留守居大井坊也。
  - 五日
  - 一、久津部陣屋年礼<sup>二参</sup>。次油山寺一色藤兵衛<sup>一寄</sup>。
- (後略)



『真俗二諦留記』(西楽寺文書近世971)

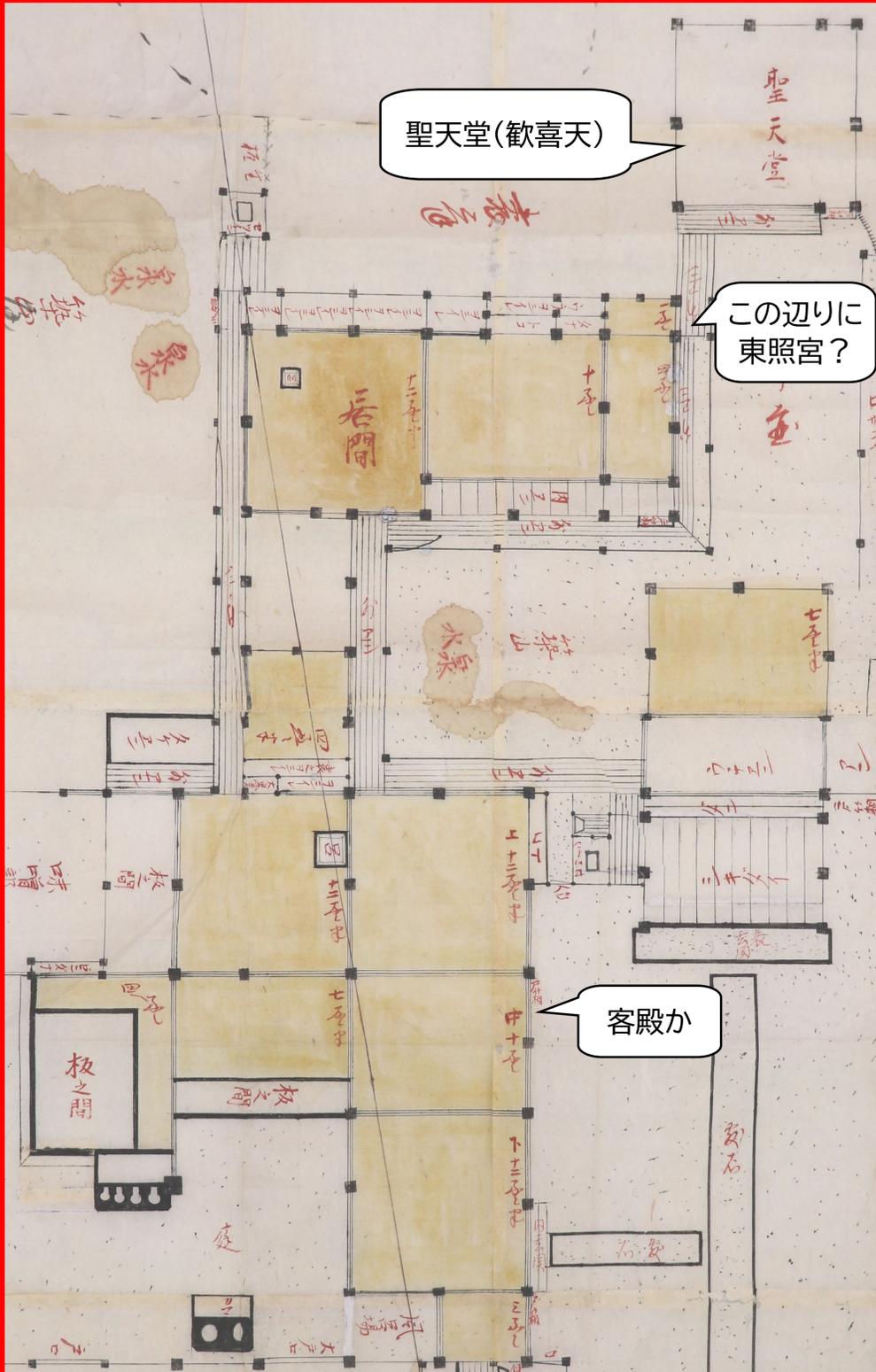
1847年頃の西楽寺の年中行事を記した『年中行事扣』(西楽寺文書近世1686)という史料があります。『年中行事扣』正月元日条を見ると、本尊の修法や鎮守(本堂前にあった十所権現)での仁王経読誦など、数多くの儀礼が行われてます。その中に、西楽寺で行われた年頭の挨拶についての次第も記されています。年神棚前で祈念している間に、勝手でお供え物の仕度をする、とのこと。『年中行事扣』正月元日条では、勝手の記事に続き、席次によって、「上の間」「中ノ間」「下の間」にそれぞれ着き、学頭(西楽寺住職とほぼ同義とと思ってください)に年頭の挨拶をしています。『年中行事扣』によれば、学頭と弟子は上の間にいて、寺役は中の間にいました。出入の人や門前の人、下の間で年頭の挨拶をしたそうです。

『年中行事扣』を記した西楽寺住職宥盛が、安政東海地震の後に、修理のため、震災直前の学頭坊の間取を書いた「先般有様之図」(西楽寺文書近世3764-3)を見ると、西側の建物(現存せず)の「内玄関」を入れてすぐに「下十二畳半」があり、そこから北へ向かって、順に、「中十畳」、「上十二畳半」と続いています。この3つの部屋が、『年中行事扣』元日条に登場する、上中下3つの部屋のことなのでしょう。西楽寺での年始の挨拶について、実際の例が見られる史料の一つが、『真俗二諦留記』(西楽寺文書近世971)です。こちらは、安永4年(1775)の西楽寺業務日誌のようなものです。元日には、西楽寺内で年礼をした後、門前百姓が来て年頭礼を行った、とのこと。その後、住職は塔頭の大坊、梅本坊へ挨拶に回りました。正月2日には油山寺・神宮寺の年礼(向こうから西楽寺に来たのでしょうか)。その後住職は塔頭の岸之坊その他に挨拶に行き、そのままご近所の林光寺、宝蔵寺、極楽寺へ挨拶に行きました。正月4日には、この年は江戸御礼番が当たっている年だったので参府。「院代岸之坊」とあり、塔頭岸之坊の住職が住職の代理を勤めました。この他、留守居に大井坊(大坊)住職が残っています。正月5日には、久津部の陣屋へ年礼に行っています。これは、院代の岸之坊住職か留守居の大坊住職が行ったのでしょうか。正月には、連日どこかしらへと挨拶に行っています。西楽寺住職だけではなく、塔頭の住職たちと手分けして、方々へと挨拶回りをしていました。



「先般有様之図」上・中・下の間周辺拡大(北が上)

# 西楽寺の東照宮



「先般有様之図」(西楽寺文書近世3764-3)部分。北が上。

江戸時代の西楽寺には、東照宮がお祀りされていました。東照宮の法要は、徳川家康の命日である四月十七日に行われましたが、毎年お正月にも、お供えや飾り付け、読経がされていました。

西楽寺東照宮の古い例は、1700年頃に八世住職尊昭が書いたノートです(『当山諸由緒扣』西楽寺文書近世11)。そこには、「卯月十七日東照宮法要」とあります。家康の命日である4月17日に東照宮の法要を行っていたようです。

尊昭のころにどのような東照宮法要を行っていたかは分からないのですが、1847年の『年中行事扣』(西楽寺文書近世1686)4月17日条に、その次第が書かれています。

『年中行事扣』によると、東照宮法要では、鎮守(十所権現)でお祭りをする、とのことでした。

御神酒を2据えと精進供(お供え物)をお供えする。三菜と赤飯をお供えして、木綿の青い幕を張り、理趣経を読誦する、とあります。

『年中行事扣』正月17日条を見ると、正月17日にも、東照宮の縁日(命日と同じ17日)ということで、客殿で理趣経を読経しています。

では、西楽寺の東照宮は普段どこに置かれていたのでしょうか。

弘化2年(1845)12月『正月御備荘取扣帳』(西楽寺文書近世1684)という、お祀りしている神様へのお供え一覧を見ると、(前略)客殿道場荘→歓喜天→裏道場→寺中本尊(後略)の順に書かれていて、この内、「裏道場」に「一、台五合 東照宮」とありました。

こうしたリストの配置は、一般的に、地図上で近い順に書いていきますから、客殿と歓喜天(聖天)の間にある建物でしょうか。

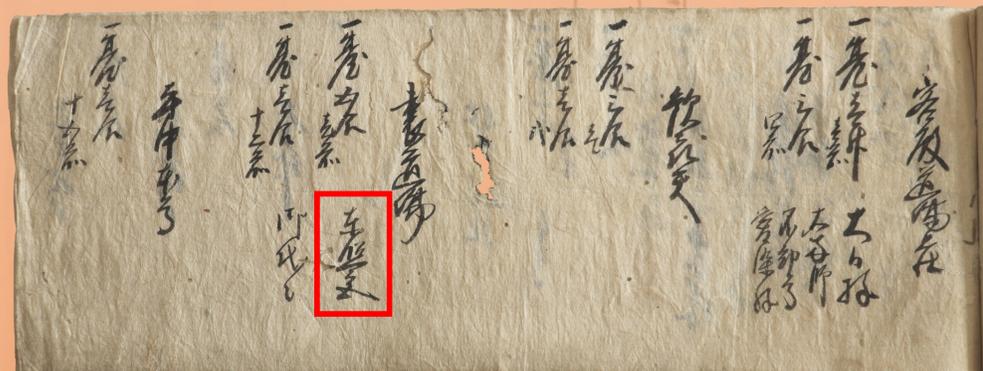
安政東海地震の後に書かれた、安政江戸地震直前の学頭坊の図面「先般有様之図」(西楽寺文書近世3764-3)を見てみると、「居間」と書かれた部屋の右に2つ行った部屋の北に、不思議な区画があります。東照宮がいたのはこのあたりでしょうか？

残念ながら、現時点の情報では、まだはっきりしたことは分かりません。

十七日  
東照宮御祭祀法要  
三菜 而外し赤飯三盛上ル也。幕ハ木綿あを也。  
紋付之幕張幟式下り立、勤ハ理趣経心経等也。  
簾等掛之出仕。昼赤飯三升。

十七日  
東照宮御祭祀、鎮守殿におみて祭り。神酒式陶精進供。  
三菜 而外し赤飯三盛上ル也。幕ハ木綿あを也。  
紋付之幕張幟式下り立、勤ハ理趣経心経等也。  
簾等掛之出仕。昼赤飯三升。

『年中行事扣』四月十七日条 東照宮法要



弘化2年(1845)12月『正月御備荘取扣帳』  
(西楽寺文書近世1684)

囲みの中に「東照宮」とある

『年中行事扣』4月17日条

# 江戸城での年頭御礼 西楽寺の寺格

江戸時代、西楽寺は、5年に1回、正月に江戸に行き、江戸城で年頭の挨拶に参加していました。

西楽寺文書では、この年頭の挨拶を「御年礼」とか「御年頭登城御礼」などと呼んでいます。今回は「年頭御礼」と呼ぶことにします。

このような、江戸城内での儀礼を、学術用語で「殿中儀礼」と呼びます。西楽寺文書では、「登城御礼」などと呼ばれています。

西楽寺の殿中儀礼が始まった頃については、初期の史料が無いいためよく分かりませんが、殿中儀礼関係の史料は、割と多く残っています。

儀礼の場では、参加者の序列が可視化されます。席次、所作、発言……それら全てが格によって厳しく定められるからです。

では、近世西楽寺の、年頭御礼の場における格(儀礼の場におけるお寺の格を「寺格」と言います)についてまとめていきましょう。

お寺の殿中儀礼に関する研究はいくつかありますが、今回は、同じ新義真言宗の田舎本寺を研究対象としている、西沢敦男氏の研究を中心に、寺社の殿中儀礼についてまとめていきます。

幕府の様々な儀式は、家綱期以降進められ、吉宗の頃までに完成したと言います。武家儀礼では、それまでほぼ同格だった大名間に、儀礼の場での序列が新たに生まれてしまい、そのことにより発生した軋轢を解決するのに時間がかかった、とも言われています。

江戸幕府の寺社向けの儀礼については、慶安5年(1652)に、関東を中心に、寺社の殿中儀礼を伴う年頭御礼・祝儀などの参加条件(寺社の序列のこと。寺の場合「寺格」と言う)を定めました。諸国の寺社・山伏の年礼参加条件(寺格)が確定したのは、享保16年(1731)のことでした。

殿中儀礼の寺格で代表的なものは、どのような形で御目見・御礼をするか、という格式と、年頭御礼のため、

何年に一度参府するか、という格式です。

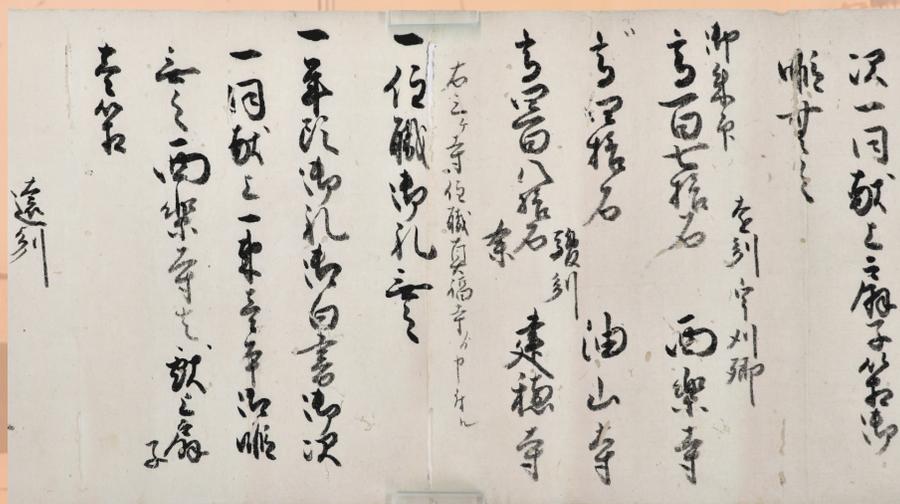
西楽寺の寺格について、「寺格覚」(西楽寺文書近世1213)という史料を見ると、西楽寺・油山寺・建穂寺でセットになっています。内容は以下のとおりです。

- ①新住職を決める時は、触頭真福寺が申しつけることになっている。
- ②新住職が決まった時の御礼は無い。
- ③年頭御礼では、「白書」(白書院)が儀礼の場。
- ④御暇は無し。
- ⑤一同で「一束一本」(奉書一束と扇一本を水引で束ねたもの)を献上する、ただし、西楽寺は、扇子一箱を献上する。

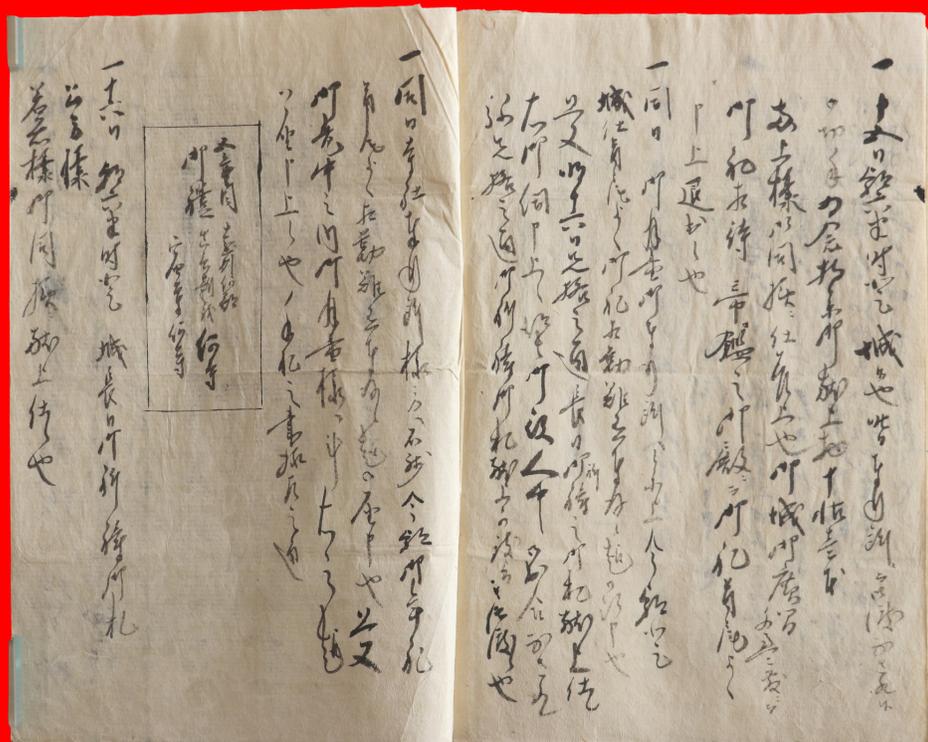
④の「御暇」とは、出府した寺院が帰国前に御暇を許され、時服を拝領する儀礼です。格式が高い遠国の寺院が御暇を許されました。

献上品の品目について見ると、西楽寺は、油山寺・建穂寺とは少し様子が違うようです。

その他の要素について、他の西楽寺文書もあわせて調べたところ、西楽寺の寺格は、朱印地を50石以上持っている田舎本寺(地方の中心的な寺院)として妥当な格だったようです。



「寺格覚」(西楽寺文書近世1213)部分



『年頭御礼勤番留記』(西楽寺文書近世1380)

## 『年頭御礼勤番留記』正月十五日条(抄)向かって右の頁

- 一、十五日朝六半時登城也。此日奉行所ニ御渡なされ候。御切手為し念持参。御献上物十状壺本。両上様御同様ニ仕、差上也。御城広間千畳敷ニ御礼相待、帝鑑之御殿ニ御礼首尾よく申上退出候也。
- (後略)

『年頭御礼勤番留記』は、年頭御礼の動きをまとめたノートです。

必要な書類の様式やその包紙に至るまで、図入りで書かれています。

正月十五日条には、待機場所と年始の挨拶を行う部屋のことや、献上品のことなどが書かれています。

なお、帝鑑の間は白書院の中の一室。献上物の「十状一本」(十帖一本)とは、奉書紙十枚と扇一本を水引で束ねたものです。

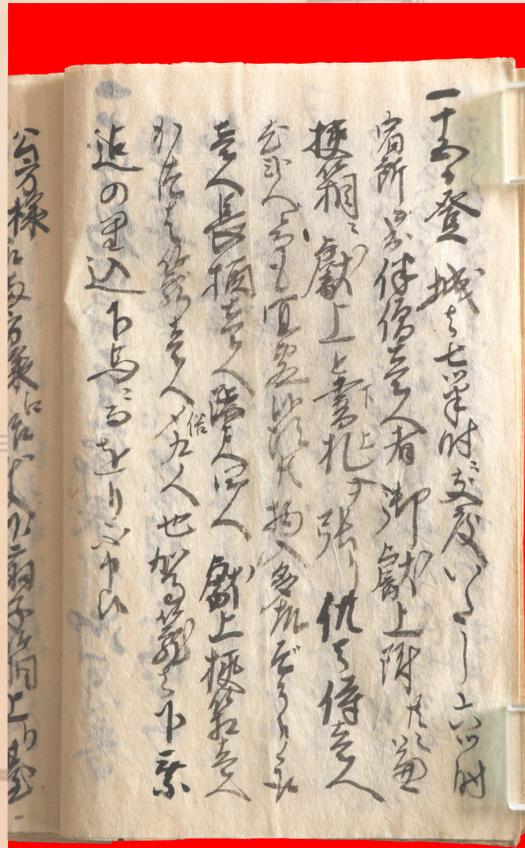
# 江戸城での年頭御礼 登城のお供

江戸城に登城する際には、お供の人々がいました。西楽寺住職が登城するときも同様です。

このお供の人たちについても、格式によって決まりがあったそうです。

お供の人たちの実例については、文化12年(1815)正月付け『御年頭登城御礼日記』(西楽寺文書近世1353)に記述があります(右に写真と文字起こし)。

西楽寺の年頭御礼の御供は、僧侶は伴僧1人、俗人は侍1人(「2人でも良いのだが、お金がかかるので1人にした」とのことです。世知辛いですね)、草履取1人、長柄1人、陸尺(雑役)4人、献上挟箱1人、箆1人の9人、とのことでした。



(前略)  
 一、十五日登 城者七ツ半時ニ仕度いたし、六ツ時宿所ヲ出。伴僧一人者御献上附共ニ兼、挟箱ニ献上と書札ヲ張り、供者侍一人。尤式人ニ而も宜敷候得共、物入多故。ぞうり取壺人、長柄壺人、陸尺四人、献上挟箱壺人、かつは箆壺人、メ九人也。駕籠者下乗迄のり込下馬ニ而をり不レ申候。  
 (後略)

板之間

## 『御年頭登城御礼日記』

(前略)

一、登 城之節御供廻リ覚

金貳朱 右者真福寺様ニ而頼

伴僧一人

金貳朱 同断

侍 一人

壺貫六百分  
八百 分

陸尺四人  
長柄持壺人

一、四百 分

草履取壺人

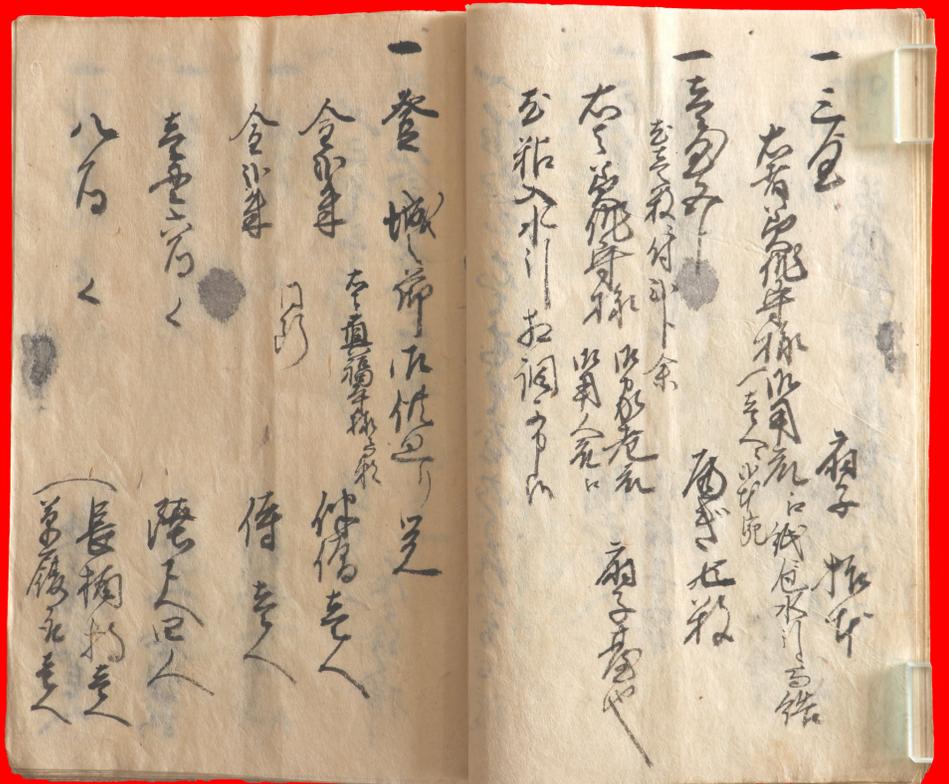
一、五百三十式分  
一、四百 分

挟箱持壺人  
平人式人合羽箆

×三貫三百三十式分  
為ニ金貳分ト三十式分ニ

朝支度弁当代  
近江屋  
庄蔵へ払

(後略)



ところで、『御年頭登城御礼日記』(西楽寺文書近世1353)には、お供の人たちの人件費一覧が載っています(上の赤帯の中に該当箇所の写真と文字起こし)。見ると弁当代400分という項目もあります。

また、伴僧と侍は触頭の真福寺に頼んで付けてもらっていることが分かります。

触頭は新義真言宗寺院の中で事務方のトップと考えていただければよろしいかと思えます。4箇寺あり、それぞれに担当している寺院が多数ありました。真福寺は西楽寺を担当していた触頭です。

侍の金額を見ると、金2朱。1人あたりの金額だと、伴僧と並んで最も高いです。やはり、触頭の真福寺に頼むだけあって、伴僧と侍はお供の中でも格が高かったようです。

なお、4朱で1分、4分で1両ですから、金2朱は1両の8分の1となります。

物価変動の具合は品目によって異なっており、全体的な物価変動に対応できる換算が困難なため、江戸時代の貨幣価値と現代の貨幣価値を比べることは、私は不可能だと考えているのですが、金額については、質問が割と多く来ますから、かなりポピュラーな計算の目安である、1両=約10万円という換算で計算すると、金2朱は約1万2千5百円となります。確かに、なかなかお金がかかりますね。